



ロータリーに輝きを



例 会：毎週水曜日 小杉苑 藤枝市青木2-35-30 TEL 054-641-3321
事務局：藤枝市青木1-11-10 TEL 054-647-2300 FAX 054-647-2040
URL <http://www.fujieda-rotary.org/> E-mail club1972@fujieda-rotary.org

会長：池ノ谷 敏正 副会長：森下 敏郎 幹事：鈴木 舜光 副幹事：大長 昭子

第2059回

● ソング それでこそロータリー
● ソングリーダー 土屋 秀夫君



【彼岸花】

写真提供：鈴木 舜光君

会 長 報 告

池ノ谷 敏正君

皆さんこんにちは。

9月は「新世代のための月間」です。

本日は、藤枝順心高校インター

アクトクラブの顧問天野良彦先生並びに7人の2年生部員の方々をお招きして、インターアクトクラブの年間活動報告をしていただきます。

会員皆様の会費の中から、藤枝順心高校インターアクトクラブへの活動費を寄付させていただいておりますので、その成果の発表をいただき、皆様の浄財が有効に使用されていますことを、再確認いただけたらと思います。

先日、私の住む地区の連合町内会で、「災害時宿泊体験」という行事が行われ、町内会の役員である私は、お世話係として出席をしてきました。広島のとどろき災害が騒がれて間もない時期だけに、とてもタイムリーな企画だったと思います。

災害時宿泊体験と言うだけあって、私どもの地区の避難所指定地である小学校の体育館をお借りして、夕方から翌朝までの避難体験でした。

参加者の殆どは小学生とその家族で、体育館のフロアーに役員の我々が用意した段ボールを敷き、そこへ一晩寝たわけです。エアコンなどなく、体育館の窓を開け工業用扇風機を3台回して涼を得ました。

避難者1人に与えられたスペースは、1メートルかける2メートル。約畳一畳強のスペースのみ。体育館の床は堅くて、立っているだけでも足腰にかかる負担は大きく、また、段ボールを引いているとはいえ、横になっても決して寝心地

のいいものではありません。

子供たちは、まるでキャンプの様なつもりではしゃいでいましたが、非常時には、これが何日も期限なく続きます。たった一晩にもかかわらず、私は大きなストレスを感じました。

広島の被災者の方々のご苦労は、計り知れませんし、東日本大震災の際に被災者の中で精神的に病んでしまった方もいたと聞きましたが、ほんの少しですがわかる気がしました。

晩ご飯は、災害備蓄食のアルファ米の五目ご飯、乾パンと有志による炊き出しでした。そして、朝食もやはりアルファ米の五目ご飯、乾パンとインスタント味噌汁。アルファ米のご飯もインスタントにしてはなかなかの味でしたが、やっぱり非常食は非常食。テレビで見ているよりも、実際は食も環境もとても窮屈と言わざるを得ませんでした。

万一の際には可能であれば、避難所へ行かずに済ませたい。災害の内容にもよりますが、できる限り自宅で生活できるよう備えておく必要があると感じました。

そのためには、家の補強もさることながら、災害を見据えた食料・備品の備蓄が大切なのだと思います。

私の悪いところではありますが、のど元過ぎるとなんとやら。

関西淡路、東日本の大震災など、折々思いはしたし、いろいろ備えもしたりしました。しかし、今も続いているのは、ポリタンクへの水の備蓄のみです。

改めて今回の体験を機に、自分の家の防災品、備蓄食料等のチェックをしっかりとし、万一の対策も講じて、その継続維持を心がけようと思った次第です。

皆様も、ご自宅の防災品を気にしてみたいかがでしょうか。

■ 理事会報告

森下 敏顯君

- ・ 9. 10月のプログラムが承認されました。
10月の職場訪問例会は「ガゼルの森」見学に決定しました。
- ・ 富士山環境保全活動支援金について、奉仕プロジェクト委員会予算内で送金することが承認されました。予算 20,000 円、うち環境保全運動参加費として 10,000 円、残金 10,000 円を送金予定。
- ・ 藤枝市民ゴルフ大会協賛のお願いについて、10,000 円の協賛が承認されました。
- ・ 河井会員処遇について承認されました。議事録については事務局まで。
- ・ 日本障害者ピアノ指導研究会主催コンサートチケットの購入について否決されました。
- ・ NPO 法人静岡犯罪被害者支援センター賛助会員について否決されました。
- ・ 第 2620 地区広島豪雨災害義援金について承認されました。
9 月 10 日・17 日例会時、会員より義援金を募り、クラブで取り纏めガバナー事務所へ送金。

■ 幹事報告

森下 敏顯君

- ・ 第 2620 地区より
伊豆中央 RC ホームページ新規開設のお知らせが届いております。
- ・ 第 260 地区より
第 13 回ロータリー全国囲碁大会のご案内が届いております。
- ・ 第 260 地区より
バギオだよりが届いております。
- ・ NPO 法人日本障害者ピアノ指導研究会静岡支部より
第 3 回静岡支部コンサートのご案内が届いております。

■ 出席報告

小西 啓一君

本日のホームクラブ 出席者	前回の補正出席者
28/42 66.67%	36/42 85.71%

(1) 欠席者 (事前連絡とメイクアップをどうぞ)

○河井君 ○杉山君 ○鈴木舜君 ○大長君
○畑君 池谷君 江崎晴君 大杉君 島村君
鈴木透君 仲田晃君 松葉義君 山田君
落合君

■ ポリオプラス寄付金

ポリオ撲滅活動へのご協力有難うございます。

本日寄付金額 4,910 円

寄付金累計額 37,731 円

■ 委員会報告

鈴木 邦明君

「富士山環境保全活動」のご案内
日 時 / 2014 年 9 月 20 日 (土)
集合時間 10:00
集合場所 / 西臼塚駐車場 (静岡県富士宮市栗倉)
活動内容 / 西臼塚駐車場周辺の清掃活動と
自然林でのエコツアー体験
活動時間 / 10:15 ~ 12:00

■ ロータリーの友紹介

石垣 善康君

2014 年
ロータリーの友
9 月号 概略報告



今月は「新世代のための月間」ですので、新世代に関する記事が中心です。

：横開きのページ

新世代の未来のために特集

地域で海外で、新世代のために汗を流すロータリアン

海外事業では、現地交流を大切に
継続した活動がほとんどです。単年度活動は、
海外援助事業は無理ということでしょう。

国内事業の報告がありました。

本物の音楽を子供たちに一五嶋みどりさんの演奏会を開催一勝浦ロータリークラブ

静岡東ロータリークラブ

21 年間にわたる河川清掃と特別支援学校訪問

ロータリーに未来をつなぐ

20 代～30 代のロータリアンを会員に増強活動をしましょう。

ロータリーを知ってもらうために一世界各地でロータリーデーを

シンプルに楽しみながらロータリーを紹介する。
会員の増加 ロータリー活動を知ってもらう
人道的プロジェクトを推進する

：縦開きのページ

p 1 8 ロータリーとは何か
三島ロータリークラブ、西原会員の
投稿がありました。

■ インターアクト年間報告

＜順心高校インターアクトクラブ＞

秋山 彩瑛果さん	渡辺 多美さん
石田 美咲さん	海野 如葉さん
浅原 菜未さん	伊藤 美波さん
太田 真菜さん	

＜ 顧 問 ＞
天野 良彦先生



『2014 年 東日本大震災
静岡県災害ボランティアについての報告』



藤枝順心高等学校
2 年
石田 美咲さん

私は、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の被災地に実際に足を運び、ボランティア活動や、地元の方々との交流を通して『ボランティア』『地域』『震災』について学び、今後の人生のあり方について考えてまいりました。

夏休みの 8 月 8 日から 12 日までの間に岩手県の釜石市・大槌町・陸前高田に訪問したわけですが、まず出発の前にボランティアの研修に参加しました。

活動するにあたって、目的をもち積極的に働くということ、『やってあげている』ではなく『やらせていただいている』と思って行動すること、自分たちがやることはほんの些細なことだから相手と同じ目線で自然に接することを学ばせていただきました。

自分の判断を押し付けてしまったり、思い込みで話したりすると相手を深く傷つけてしまう。被災地という言葉一つとっても住んでいる人にとっては故郷(こきょう)でありふるさとです。瓦礫(がれき)だって我が家であるし、ゴミであってもかけがいのないものです。これが、被災された方の目線なのです。私は、被災された方の話を受け止めてあげることで、その方の癒しになれるような活動ができればいいと思いました。

さて、いよいよです。8 月 8 日夜 8 時に静岡を出発し、バスで高速道路を使って、翌朝 8 時過ぎに釜石市の絆ハウス鶴住居(うのすまい)に到着しました。鶴住居というところは、みなさんがよく知っている、あの、『釜石の奇跡』と『釜石の悲劇』の場所です。この話については、私が実際にその避難経路を歩いてきたので、のちほどお話しします。

到着してすぐに、慰霊碑の前に立ち、参加者全員で黙祷を捧げました。私たちが立っているその場で、何百人もの人たちが亡くなった事実を聞くと、とても悲しくなりました。

犠牲者の冥福をお祈りした後、私たちはすぐに大槌町(おおつちちょう)の小槌(こつち)仮設住宅近くの集会所に行き、荷物を降ろしました。そこが、私たちの活動の拠点になったわけです。

まず、東日本大震災についての認識をより広げ、より深めるために、この日は 2 人の方のお話に耳を傾けました。

大槌保育園の八木澤弓美子園長のお話は、『存在したものが、ほんの数分ですべて無くなってしまった。』という衝撃的な一言からのスタートでした。海から 1.2 km の場所にあるこの保育園では、地震の後には必ず津波が来るという想定のもとで訓練が何度も行われて、102 人のこどものうち、保育士一人で赤ちゃんなら 1 名、園児なら 2・3 名を責任をもって助けること等を話し合っていた。

3.11(地震当日)、高台への移動の際に 70 人の保護者が迎えに来たため、園児 20 人と先生方は、急こう配な道を山の 8 合目まで登った。多くの乗用車をおもちゃのように飲み込んでいく津波や、火事。『こわい、寒い』とつぶやく子どもたち。

先生方は、子どもたちを避難させたのち、自分たちの家族を捜した。長いトンネルを抜けて、町の方角を見ると何もない光景が目に見え込んできて、おもわず立ち尽くしてしまった。『大丈夫

だった?』『ダメだった。』という会話があたりまえにあったそうです。

3日間食事もとれず、多くの人たちが不安や疲労感におそわれている時、ローソンさんがお弁当やおにぎりを差し入れしてくれた。6個のお弁当を30人で食べた。こどもたちは『おかわり、もうないの』とか『ママ』とかいうことばを一言も発しなかった。わがママを言ったら生きていけないということを本能的に感じていたのかもしれない。

一人が亡くなることだって大変なことなのに、数えきれない遺体がブルーシートにくるまれた状態であった。その中に自分の園児の遺体をみつけた時の脱力感は説明できません。

保育園は6月まで復旧できず、仮設の保育園で生活することになりました。遊具も何一つ無い中で子どもたちは過ごしましたが、自然の中での遊びを身につけていきました。そしていざ、再び元の恵まれた施設に戻ると、「仮設の方が良かった」と子どもたちが口をそろえて言うのに驚かせられました。自然を好む園児の気持ちを震災によって教えられるとは夢にも思いませんでした。遊具一つを設置するのに数百万円かかるのに無くても良いなんて……。復興に向けて進んでいると思っていたのに本当に今のままで良いのかと悩んでいる今日この頃です。

こんな風に園長先生は語ってくれました。わたしは、この話をお聞きして、震災というのは多くの人の命を奪い、生活を奪うばかりでなく、人の生き方や考え方にも大きく影響することを学ぶことができました。

小槌仮説住民代表の臼澤良一さんのお話では、ドミノ倒しのように流されて近づいてくる家屋や、車で逃げた人たちの、クラクションの音など津波の恐ろしさばかりではなく、仮設住宅で生活する人々の事情を詳細に聞くことができました。

3年たった今、引きこもり・自殺・ドメスティックバイオレンス(DV)・アルコール依存症の人が急増しているそうです。仮設住宅の壁はとても薄くて、隣の音が全て聞こえてしまうため、プライバシーが守れず、テレビのボリュームも3より大きくできないそうです。小さい子どもをかかえていると、隣に迷惑がかかってしまって罪悪感にさいなまれることもあるそうです。

多くの、大きなストレスや苦しみを抱えて生活をしている人たちが仮設住宅にはたくさん居

ます。その人々の力になるべきカウンセラーの数も足りないのが現実だそうです。

この話を聞いて、私は人の苦しみを分かち合うこと、理解し合うということの大切さが骨身にしみて分かりました。

この日の夕方は、私たちみんなでカレーとかき氷を作って仮設住宅の人たちと一緒に食べました。皆さんとても喜んでくれて、少しでも役に立てたことがとても嬉しかったです。

翌日8月10日は、バスで釜石に行き、実際に『釜石の奇跡』・『釜石の悲劇』の避難経路の往復4kmを歩いてみました。

『釜石の奇跡』とは、釜石市の小中学校全生徒2926人中、学校を休んでいたなどの5人をのぞく全員が津波から逃れたことをいいます。小中学生の生存率は実に99.8%。

反対に『釜石の悲劇』とは、「ここなら大丈夫」と防災センターに避難した、多くの住民が津波の犠牲になってしまった事を指します。200人以上が亡くなられたそうです。

生徒たちがたどり着いた恋ノ峠(こいのとうげ)までは行かなかったのですが、この道である日、釜石東中と鶴住居小の生徒たちが危険な状況から自分の命を自分で守りきったのかと思うと、多くの人数で実際によく乱れずに行動できたと感心しました。

また、防災センターの跡地では、亡くなられた方々のご冥福を祈り、命について考えました。

ここでは、訓練の大切さを学ぶと同時に、思い込みや過信が悲劇を生むことを理解することができました。

普段から当たり前の訓練を丁寧に確実に行っていた。「練習は本番のつもりで、本番は練習のつもりで」、これこそ、私たちの学校でよく言われている「凡事徹底」(ぼんじてつてい)の成果だと思いました。

最期の活動日8月11日は、陸前高田市を訪問しました。ここでは、語り部の釘子明(くぎこあきら)さんの案内で、市街地や海から2.5km離れた海拔18メートルの高台に行き、震災の現状の説明を受けました。家族や知人の消息を調べるには、最寄りの神社や学校、避難所、病院の順で捜し、最終的に遺体安置所で確認することなどが、私にとって耳をふさぎたくなるようなことが、現実として突きつけられてきました。

避難所の数は最大84ヵ所、避難所人数は最大10143人に及んだと言います。釘子明さんは

陸前高田市立第1中学校に避難して、市民の人々とともにこの中学校で避難所を立ち上げました。仮設住宅ができるまでは、避難所は必要不可欠です。多くの部屋を有効に活用するには長期間の試行錯誤が必要です。だからこそ、他の都道府県でも避難所として利用できる施設は、東北の避難所を参考にあらかじめマニュアルを作成して、いざという時に生かして欲しいと話されていました。

私たちは、奇跡の1本松や復興工事の現場を視察した後、再びバスで大槌町に戻り、地元の高校生とともに、ペットボトルに半紙を貼ってキャンドルを作り、3日間で感じた各自の思いをメッセージに託しました。私は『ピンチはチャンス』と書きました。この日は、震災から3年5ヶ月となる月命日。

大槌町を一望できる高台に移動し、火を灯したキャンドルで『命』の文字をつくり、手を合わせて祈りを捧げました。とてもきれいで、地元の方々も喜んでくれたので、私も嬉しくなりました。本当に些細なことしかできないけど行って良かったです。

阪神淡路大震災後、もうすでに神戸は何事もなかったように復活しているかに見えます。東北もそんな雰囲気になって行って欲しい。そしてそれと同時にこの惨事を忘れないことも一方では大切なのではないかと思います。



(担当／大石君)